

第5章 文化財の保存・活用に関する将来像と基本的方向性

5-1 目指す将来像

今日の本市を構成する大きな要素として、文化財は欠かすことはできません。文化財は地域のアイデンティティとして、本市の特徴を示すものですが、一方で市民の文化的向上に資するものであり、次代を担う人材育成にも欠かせない重要なものです。

しかしながら、先人の営みによって築き上げられた文化財も様々な社会的要因により本市では、人々の営みとは乖離した状況も見受けられます。

本計画は、序章で述べた「みまさか人」育成のための土壌醸成を目標とします。土壌醸成とは、文化財に触れる機会を増やすことによる市民の文化的思考力向上をいいます。

本市には、第3章で述べたとおり、山の資源による製鉄遺跡や木地師に関連する歴史文化、また後山修験道行場や真木山長福寺に代表される山林寺院など信仰に関する歴史文化があります。交通の要衝として人々や文物が辿った痕跡に、宿場の町並みや道標、また上方の影響を受けた獅子舞や農村歌舞伎などが遺っています。

このような多様で豊かな歴史文化は、自然と共に歩んできた先人によって育まれてきたものであり、これらの本質的価値を明らかにして、その重要性を学び、後世に伝えることが文化的思考力向上につながると考えます。文化的思考力を伸ばすことは、本市の総合戦略で掲げる基本理念である「自然と笑顔が輝くまち・美作市」の実現につながるものと考えます。

このため本市では、市の総合戦略の基本理念に沿って、本計画の将来像を

『豊かな自然に育まれた歴史文化を「みまさか人」でつなぐ』

と設定します。

5-2 将来像実現のための基本的方向性

将来像を実現するため、本市では文化財の保存・活用に関する方向性を下記のとおり定めます。

(1) 「文化財にふれる・学ぶ」

文化財を深く知るため、実物、背景にふれる必要があります。文化財にふれる機会をふやすことは、文化財を身近に感じ、守り繋いでいくことになると考えます。また市民の文化的思考力の向上に資し、「みまさか人」育成に繋がると考えます。

(2) 「文化財を守る」

文化財は地域のアイデンティティでもあることから、文化財を守ることは地域を守ることに繋がると考えます。文化財を保存し、次代へ継承するための様々な方法を考える必要があります。文化財を守ることで、文化財にふれる機会を増やすことに繋がると考えます。

(3) 「文化財をつなぎ、磨く」

文化財を次代へ継承するためには、文化財の所有者のみならず所在する地域などの連携が必要となります。連携による繋がりや次代へ文化財の襷をつなぎます。また身近な事象の特徴を感じたり、従来の文化財の類型に当てはまらない枠組みを自ら創造することで郷土愛を育みます。また現在まで積み重ねられた既存の文化財の年輪に現代の新たな年輪を加えることで文化財の魅力向上に繋がると考えます。